青春、朱夏そして白秋へ
一心理学徒のたどった心の旅

三島　正英
Masahide　MISHIMA

はじめに

心理学への興味が湧き上がってきた。高校生活も終盤に入りかける２年生の冬頃のことである。大学受験を間近に控えるなかで、進路について考える必要に迫られていた。高度経済成長社会の到来が予見されるなか、佐賀という保守的な地で育つ文系志望の若者にとっての将来像とは、世界を股にかける商社マンやマスコミ特派員あるいは法曹といったものが一般であった。

そこに違和感が漂い始めた。「自分とはいったい何なのだ」という問いであった。「仲間と騒いでいる偽悪ぶった自分と自室に籠もっている小心な自分」、「親へのアンビバレントな態度や行動」、「いいなあとあこがれる女子像の乖離」、「めざす将来像の混乱」‥。後にして思えばEriksonによって示された青年期の自我形成をめぐる葛藤と混乱こそがその本質であったか。この問題の解決こそが当時の私にとっての最大の課題となった。

「心理学」という学問がある。どのような学問かはわからないが、「心理学」というからには、「自分とは」という問いにもっとも直接的なかかわりを持つ学問に違いない。この学問は、「自分とは」という問いと共に、「生きるとは」あるいは「人生の価値とは」といった、当時の級友たちと交わし始めた「人生の意味」とでもいった問いへの答えをも与えてくれるような気がした。

あれからずいぶんと時間が経ち、私は６５歳を間近に控えて定年退職を迎えようとしている。過ぎ去った自らの過去を振り返り、総括した上で今をみつめなおしておくことは、一心理学者として、とりわけ心がたどる道筋を研究する発達心理学徒のいったんの区切りとして、果たしておかなければならない責務のひとつとも考えられる。

この小文では、これまでの研究や行動を振り返りながら、それらに伴う折々の心の動きについて、自らの自我のありようを核にしながら総括することを試みた。右も左もわからない修業時代から始まり、自らの定めた目標への接近、そしてさまざまな状況の中で課された責任とその遂行への没頭、そしてそれからの解放。それらはまさに人生の春夏秋冬を思わせる変化としてここまでの私の人生を彩ってきた。そしていま、「老い」という現実を前に、ここに至って感じ始めている「心の動き」が産まれてきている。これらは私自身のライフイベントの一部に過ぎないものではあるが、一発達心理学徒がたどった事例的経路として「人がたどる心の道筋」の一端を示すものだとすれば、それを記しておくことには一定の意味があるであろう。

若さとは幼さであるとともに、その未熟さ故に将来への可能性を限りなく有した存在でもある。いくらか早く生を受け、そして去っていくものにとって、自らがたどった心の途の披瀝をとおして、これからが期待される若者たちや後進に、なにかひとつでも心に残せるものがあれば幸いである。

１　青春

１）心理学事始め

「自分を知る」。私の心理学への関心は、このテーマから始まった。しかし、大学に入ってからの２

年間は、当時の大学制度のなかでは教養課程であり、一般教養科目と語学を中心としたカリキュラムをこなさなければならなかった。しかも私が入学した1969（昭和44）年は、全国的に大学紛争が拡大し、入学間もなくしてキャンパスは学生自治会によってバリケード封鎖されるなど、混乱のさなかにあった。

「大学へは進むもの」、そして「そこで学び卒業する」という目標と日常は、いわば疑うことのない所与のものと考えていた私にとって、授業が行われない大学の日常は、自らの存在への大きな問いかけをなすものであった。当時のクラス討議では、「主体性」という言葉で自己への問いかけが常に行われていたが、「大学とは」、「卒業とは」、「大学で学ぶ意味とは」といった問いは、それまでの自らの生き方を問い直すには重すぎる課題であった。まわりを見まわしても、田舎でエリート的存在として受験戦争を戦い抜いた仲間や、高校時代にさまざまに活躍し、自信があった者ほど、突きつけられた存在や価値への問い直しに苦しんでいた。1977（昭和52）年の芥川賞作品、「僕って何」（三田、1977）は、当時のキャンパス風景とノンポリながらもさまざまに自らの生き方への問い直しを迫られた我々団塊世代の赤裸々な姿を描き出している。コホートとしての団塊世代の精神性の一端は、学園紛争の体験のなかから紡ぎ出されているということができる。私自身、さまざまに苦悶しながら「自分とは」という問いへの答えを求め、「ノルウエイの森」（村上、1991）の主人公ではないが、「僕は今どこにいるのだ？」（p.262）と一人ふらふらとさまよっていた。

３年生となり、心理学専攻課程に進んだ後も、無為に時間は過ぎていった。その理由は、やっと進んだ専門課程で学ぶ心理学へのある種の幻滅であった。行動科学としての心理学に一定の納得はするものの、どうしても納得できなかったのは「人」の姿が見えてこないことであった。そのようななかで自ら納得できる領域を探して出会ったのがPiagetであった。Piagetによって示される大人とは違う子どもの心性についての知見は、まるで手品のような手法とともに、私の「自分を知る」というテーマに添うものとして血肉となっていった。とりわけ「自己中心性」に基づくとされる幼児期心性についての各種の知見は私を魅了し、Piagetを師として私淑することを決意したほどであった。しかし当時は、なかなかPiaget理論の本質を理解し難く、苦吟しながら我流の解釈を積み重ねて行かざるを得ない状況がつづいた。

当面の課題は、当時の指導教授小嶋謙四郎先生によって示唆された。小嶋先生は母子関係、とりわけBowlbyのアタッチメントセオリーの研究者として知られていたが、アタッチメント形成に係わる乳児の認知的能力の研究を私に勧められた。その理由は、「自分を知りたいというのなら、赤ちゃんから始めたらどうか。そして児童、青年と追っていけば、老いる頃には老年期の研究ができるのではないか！」というものであった。

この示唆はストンと私の胸に落ちた。確かに自分を知るというなら、その初期である誕生から始めるべきであろう。そしてまた、それ以上に私を赤ちゃん研究に駆り立てたのは、Piagetという巨人の理論を超えるには、その基本的な前提を検証することから始めねばならないというある種の決意に似た意志であった。当時の発達・児童研究においては、その多くがなんらかの形でPiagetを参照している状況のなかで、若気の至りとはいえ、Piagetを超えることが私の目標となった。

その目標達成に向け、「いつ頃赤ちゃんは、見えなくなってもモノは存在しつづけるという認識(object permanence：対象の永続性)を獲得するのか」という問題(Piaget, 1954)の追試的検証から私の研究のスタートは切られていった。当時、この問題をはじめとしてPiagetの乳児期に関する我が国の研究はきわめて少なく、欧文を中心に資料を漁ると共に、Piaget理論の消化に全力を傾けることとなったが、成果は遅々としてあがらなかった。

そのようななかでこの研究の意義が少しづつ見えてきた。しかし、その内容は私の力量を遥かに

凌ぐスケールの中にあることがわかってきた。すなわち、object permanence の問題は、Piaget 理論の中核となる構造論において、そのもっとも初期形態である感覚運動期の実在認識を示す中心的証拠として扱われており、のみならず発達初期の原初的自己中心性（中心化）から青年期の脱中心化へと進む発達的変化の中核的説明のひとつとして扱われていることが明らかになってきた。

このような大きな課題を前に、試行錯誤の中での赤ちゃん研究をスタートさせ、修士論文でも継続して取り組んでいったものの、自らの研究がどの程度の水準にあるのかもわからぬままの状態であり、その状態が変わることはそれからも当分ないままであった。そのようななかで、研究を目指すということへの自らの姿勢に揺らぎがなかったのは、今思えば、目標に向かおうとする向こう見ずな若さの故であったのと同時に、研究に協力してくれる保育園の赤ちゃんたちと一緒にいるときに感じる、ある種の心地よさによるところが大であった。そこには、自分でも驚くほど素直な、ありのままの自分が居た。

２）山口へ

「山口で助手を公募している」という話が大学院の指導教授より伝えられた。「応じる気があるなら推薦する」という言葉に、さまざまな想いがかけめぐった。修士論文作成が思うにまかせず、博士課程への進学にも暗雲が立ちこめていた。公募であり、採用されるかどうかを運に任せた結果、山口への着任が決まった。25 歳であった。

辞令には「山口女子大学文学部児童文化学科助手（兼山口女子短期大学保育科助手）に任ず」と記されていた。キャンパスには、新設成った４年生大学の１期生と、女子短期大学最後の学生が在籍しており、新たな生活が始まった。

想像はして来たが、研究を進めるには不利な条件ばかりが目についた。助手という勤務上の制約、情報の少なさ、指導を仰ぐ体制の不備、研究仲間の不在などなど。他罰的に処理することによって鬱憤を晴らすという悪癖が身についた。そのようななかでの救いは、私を迎え入れてくれた学生諸姉たちの純朴さであった。山口の四季の移ろいのなかで、これまでの人生の垢とでもいうべき虚勢や見栄を張る態度への反省が芽ばえていった。

「なにかひとつ、この問題で第一人者になる」という気構えで研究に取り組むことを決意したのは、山口での生活も３年目を迎えた頃であった。家庭を持ち、将来への展望を開かねばならない必要に迫られてのことでもあった。帰るところがあるとすれば、Piaget 研究、しかも、ささやかながら根っこのある object perrmanence 研究しかなかった。

当時、乳児研究は新たな展開が急速に進みつつある状況であった。「赤ちゃん学革命」と名付けられたそのブームは、コンピューターをはじめとする解析機器の急速な進展により、「有能な乳児 (competent infant)」という見方を一般のものとしようとしていた。それは 1960 年代、アメリカにおいて Piaget が”再発見”されたことにその端緒が開かれたとも云うべき事象であった。すなわち、Piaget の発達論は誕生直後に知的機能の発端を認めており、「有能な乳児観」の魁は Piaget であると云ってよい。

折しも私には、長男が授かった。長男には災厄であったろうが、私にとっては格好の確認対象が身近に存在することとなった。Fantz や Bower らによって示された赤ちゃんの能力に関する諸々の実験結果について、我が子をとおして確認を得ることができたことは、その後の研究の方向性をより確かなものとするうえでなによりの手応えとなっていった。だが、独立した一人前の研究者として拠って立つだけの実力は未だ不足しており、正統な学術雑誌への投稿に向けた苦闘はつづいていた。

そのようななかで、久米稔早大教授からは折りにつけ不肖の弟子への督励が届けられていた。とりわけ家族や子どもの問題にかかわる英米書の翻訳を命じられたことは、object permanence の問題という特化した課題にはない、幅広い見方を身につけていくうえでのまたとない機会となった。

とりわけ、D. Elkind の「急かされる子どもたち (The hurried child)」(エルカイント、1983) を翻訳する機会が与えられたことは、私自身の、子どもの発達を見る視点を確立していくうえで限りない影響を受けることとなっていった。

発達初期の認識発達研究の面では、独立した研究者としての担保となる学術誌への投稿を当面の目標とする努力がつづいた。いくつかの雑誌への投稿は「不採択」となり、その結果に落ち込む日々がつづいた。自らの力量への信頼は揺らぎ、一生、学術誌への掲載がないままに終わるのではないかという不安にさいなまれた。それは、大学教員としての失格を意味する。不屈の闘志などではなく、ただひたすら、自分自身のためにのみ、自らの力量向上に向けた努力をするしかなかった。課題の設定を吟味し、研究方法を既載論文に学び、結果の処理法について教えを請いながら、なんとしても自らのアイデンティティ確立のためにやり抜くしかなかった。

そのようななかで、自らの努力によるはじめての学術雑誌掲載の通知が届いた。「教育心理学研究」に掲載された「複数母提示による乳児期初期の対象の同一性形成についての追試的検討」(三島 ,1982) という論文こそ、私にとっての最大の記念論文となった。自らの自信が取り戻された瞬間であるとともに、私の人生の中での「嬉しかったことベスト１０」に入る出来事でもあった。そのとき、32 歳になっていた。

２　朱夏

１）達すべき目標に向けて

当時、大学教員として果たすべき自らの目標として、３つの課題を心に秘めていた。そのひとつは、「単著学術書の刊行」であり、二つ目は「博士学位」の取得であった。そして３つめはそれらの帰結としての「教授職」就任であった。

当時の博士学位、とりわけ文学博士は、長年の研究生活の集大成として授与されるという性格が強く、事実、取得者は極めて限られるとともに、各大学において授与予定者序列とでも云うべき暗黙のルールがある中で運用されているのが実態であった。

講師職を得た後の当面の目標は、学位の取得であった。助手職の制約からも解放され、猛然と研究に没頭していくこととなった。テーマはここでも object perrmanence を中心とする認識発達の問題であった。燃えさかる夏に向けての静かなスタートが切られた。当時、object perrmanence をめぐる問題は、欧米を中心に実験的検証がさまざまに進められるとともに、見えなくてもモノが存在しつづけるという指標をめぐって Piaget 流の manual search によらず、馴化（habituation）法による研究が始まるとともに、それに基づく新たな知見が産み出されつつあるところであった。また、それらの研究をふまえ、Piaget によって措定された発達段階、あるいは自己中心性概念への見直しが急速に産まれつつある状況であった。

さらには、Gibson らによる直接知覚論をはじめとする見解は、Piaget 型の構造を媒介した認識のあり方への鋭い批判を向けていた。また、生涯発達的観点の強まりとも相俟って、Piaget 理論を生物主義として難じる流れも強まる状況の中にあった。

そのような状況の中で、私自身は Piaget 理論の魅力をむしろ生物主義的であるところにこそあると感じていた。それは学生時代からの心理学に対する幻滅のひとつに由来するものでもあった。すなわち、科学的であれとする行動主義的伝統は人全体を語らず、また一方で、臨床的事例研究はヒト一般について語ることができるか否かが常に判然とせず、いつも心理学研究の半端さを感じていたからであった。

生物学で構わない。いやむしろ種としてのヒトが辿る精神発達の途があるとするならばそれを知りたい、というのが私自身の Piaget への傾斜であり、事実、Piaget の発達論はまさに「精神生物学」とでもいうべき認識発達の解明を目指すことに主眼がおかれていることこそ、その最大の特徴として強調されるべきであるというのが当時の偽らぬ

想いであった。Piagetian を自認し、自らの研究者としてのアイデンティティをそこにしっかりと定めながら、保育園に通う日々が続いた。

２）David Elkind の下で

1987（昭和 62）年から 88（昭和 63）年にかけて、Boston 郊外にある Tufts 大学の D.Elkind 教授の下で研修する機会が与えられた。Elkind 博士は J.H.Flavell と並ぶアメリカにおける Piaget 研究の第一人者であり、Piaget のもとに留学した経験も有する研究者であった。

Boston での生活は、研究に向けての私の視野を広げただけではなく、私自身の生き方や自我のありように大きな転換点をもたらした。Elkind 研究室での大学院ゼミの闊達な議論、学部学生の受講姿勢など、私にとっては目を見開くばかりのカルチュアーギャップを感じつつ、丁重に私の質問に答えてくれる Elkind 博士の態度に、アメリカならではのフランクさと真摯さを感じるなかで、はじめて自らの Piaget 研究にかかわる師を得た。言葉の問題が障壁とはなったが、Piaget 理論への反証的証拠が増えつつある状況について質問した。それに対し Elkind 博士から「Piaget の理論は全体論（whole theory）だ」という答えが返ってきたことに、妙に納得したことがなつかしく思い出される。

研究以上に影響を受けたのは、研究室のみならずアパートの隣人、長男の学校で出会った息子の友人たちや先生、公園で出会った人々など、滞在中に出会った多くの人々から感じた「生き方のとらわれなさ」とでもいうべき生きる姿勢であった。アメリカンドリームというが、誰にでも公平にチャンスはあるという生き方がその底に深く流れていることが感じられ、その後の自らの生き方に、大げさに言えば自我やアイデンティティのあり方に、今日に残る影響を受ける経験となった。

３）目標の実現へ

帰任してからの数年が、夏の盛りに入る時期となった。自ら課した目標に向け、精進する日々が続いた。勢いのあるときは周囲からの支援も転がり込んでくる。科学研究費の支援などもあり、object　perrmanence をめぐる乳児観察に没頭し、データを収集すると共に論文に仕上げ、学会誌への投稿に向かう日々が続いた。それらの成果は一定のまとまりを持ちはじめ、それらをふまえて学位論文の執筆に取りかかった。

執筆にあたっては、論文による博士学位の請求という状況をふまえ、主査教授や審査にかかわる心理学教室への事前の打診などが必要であった。今にして思えば怖いもの知らずの「井の中の蛙」で、幾重にも重なった切り立つ崖の尾根を無防備なままに渡ろうとしている状況であった。その背景のひとつには、文部科学省の学位規程が変更されるという経過的状況があった。博士学位が、業績の集大成的評価ではなく、自立した研究者としての証という欧米流の水準へと切り替えられようとしていた。それに伴って学位標記は博士の後に括弧つきで領域を示す表現へと変更された。その一方で、審査手続き、とくに論文博士の審査に当っては、多くの大学でまだ旧来のままに手続きが進められているといった変則的な状態であった。

唯ひたすらに学位論文執筆に向かうに当たっては、逼迫するいくつかの状況があった。そのひとつは、先にも記したいくつかの状況とも相俟って、Piaget 理論がかつての輝きを急速に失い始めており、Piaget 理論の総括的意義という観点から、このタイミングを逃すと私の研究の意義が減じられる恐れが予見されたことであった。またもうひとつは、本学の改組転換に向けたスケジュールが現実味を帯び始めてきており、この期を逃すと、その作業に忙殺されかねず、論文執筆に大きな影響を受けるであろうことが予見されたことであった。

その頃の生活は、今振り返ると、人生の中でもっとも机についていた時間であった。大学の時間割に合わせて、一日のスケジュールをコマに区切る生活が続いた。朝、長男の小学校登校につきあって家を出、７時半から９時頃までを最初の１コマ。大学の時間割どおりにそれから４コマ。そして当

時は午後４時にそれが終了するので、それから７時まで２コマ。帰宅して夕食を摂り、それからさらに我が家で１コマ計８コマを最低のノルマとして、論文執筆に向けた文献の読み込みと執筆に費やす時期がつづいた。それは数年間にわたってつづいた。そのようにして提出が叶った私の博士論文「発達初期の対象認識についての研究」は、その後、足かけ２年をかけたいくつかの審査の関門を経て無事合格し、博士（文学）の学位が授与された。

また、この論文は科学研究費の出版助成を得て風間書房より出版することができた。これらの過程を経る中で、当時の文学部に於いて教授職への昇任も審議了承されるという結果をも伴い、目標とした３課題が時を隔てずに叶えられるという幸いに恵まれた。42 歳の時であり、人生の夏の盛りを迎える時期であった。

４）課された責任への没頭

「禍福は糾える縄」という。「好事魔多し」とも云う。学位も取得し、学会での更なる評価に向けての活動こそが自らのアイデンティティのなかで目指すべき第一優先事項であった。実際、研究者としてのアイデンティティの確立こそが、この間、一貫して探し、創り上げることをめざし、そして積み上げてきたものであり、それへの落ち着きを得て、更なる発展を期す体制を構えることが、もっとも自然の成り行きであった。

ところが、さまざまな組織的状況が、私の身に新たな課題を振り向けてきた。本学の新たな展開に向けた組織再編の動きと、それに伴うキャンパス整備計画がいよいよ現実のものとして浮上してきた。当時、多くの教員がその作業に関わることになった。それは、本学が県政課題として意識され、また巨額の投資も予定されるという、着任以来はじめて経験する大きな動きであった。

私自身が担ったのは、文学部の改組転換に伴う、新たな学部の立ち上げに向けての作業であった。いくつかの曲折を経て、社会福祉学部の立ち上げに向けて作業を進めることとなった。この間の事情の一端は、社会福祉学部紀要の前年度（Vol.20）号に「社会福祉学部の源流を探る」という形でインタービューを受けているので、そちらを参照いただければ幸いである。この作業そのものは、軍隊組織的に云えば、いわば若手将校としての作業であり、カリキュラムの構成や目指す人材育成像など、理想型を求めての作業であった。それは、新たに産み出すものへの期待に夢ふくらむものでもあり、一時的な負担として甘受するべきものと捉えていた。

一変したのは 1994（平成６）年、学部が立ち上がってからのことであった。諸般の事情から学部の運営に中心的に関わることを求められることとなった。学部が立ち上がれば研究室に帰れると期待していた身には青天の霹靂であった。それらを要請した当時の大学執行部の殺し文句は、「おまえは学位も取ったし、これからは組織のことを考える時期だろう」というものであった。

当時、社会福祉学部の教員の中で最長在籍者は私であり、教授への昇任も済ませたところであった。いわば、状況の責任として、私はその役割を受け入れた。しかし、その日々は、毎日の出校が心理的負担となる状況が続くとともに、自らのアイデンティティ拡散に混乱する精神状況をやっとの思いで押さえつけるという状態がつづいた。とりわけ、組織運営についてなんの訓練も受けていない者にとって、新設社会福祉学部の運営は難題つづきであった。学部の基盤整備に向け、走りながら考えるという日々が続いた。

そのような日々の中から、組織運営と研究との共通点に気づき始めてもいた。いずれも問題を明確にし、そのためにこれまでの営みを検証し、関連する情報を収集し、それをふまえて具体的課題を設定し、議論を経て導き出される結論を根拠を明示しながら処理していくという方法は両者に共通であった。状況の責任として引き受けた学部の基礎固めの役割は、足かけ８年におよび、その間開催した教授会は１５０回近くに及んだ。

しかもこの「小要請の受け入れ」として始まった学部運営への参画は、その後の大学運営への参

画という大要請に抜き差しならない関与を始めていく態度変容をもたらすきっかけとなっていった。

すなわち、学部の基礎固めの経験をとおして、自らの中に、大学の将来に向けたビジョンとでも云うべきものも見え始めてきた。それは当時、大学執行部から、「研究者としてなし得る将来と、そのエネルギーを後進を育て大学を発展させることに向けるとして、どちらが生産的だと思うか」と問われたことに対する自分なりの答えでもあった。Erikson は、成人期の課題として「生殖生（世代性）対 停滞（自己陶酔）」という心理社会的危機を設定している（エリクソン ,E.H.・エリクソン ,J.M.、2001）。Erikosn の云う生殖生（世代性）とは、成人期の課題として「自らが産み出したものを守り、育む」という行動を示している。私自身、そのことには強い共感を感じていた。必然的に、大学の将来ビジョン実現と自らが果たすべき責任とが共鳴していった。この作業に加わることを決意したが、当時、その作業が想定を超えるほどに長期化するとは思いもしないことであった。

すなわち、1994（平成６）年の社会福祉学部の立ち上げと初期の運営に参画してからは、1996（平成８）年の看護学部の開設と共学化、1999（平成 11）年の大学院の開設と地域共同研究センター（現共生センター）の創設、そして 2006（平成 18）年の独立行政法人化と大学院博士後期課程の開設、さらには 2007（平成 19）年の学部再編と、息つく間もなく課題を遂行していく作業に没頭する日々が待っていた。

これらの課題は、みなそれぞれに難題を孕んでいた。共学化に向けては、女子専門学校以来の伝統をどのように理念的に整合させるかという困難な課題があった。それは、女子専門学校以来の共学の伝統を、「人間性の尊重」、「地域との共生」、「生活者の視点」、「国際化への対応」という時代や社会の求める価値や行動へと象徴・昇華させることで整理が試みられた。それに従い、2007（平成 19）年の再編へとつながる現在の学部構成への理念的根拠が産まれた。それは組織としてのアイデンティティを明確にする試みでもあった。

大学院の開設、とりわけ 1999（平成 11）年の健康福祉学研究科修士課程、そして 2006（平成 18）年の博士後期課程の開設にあたっては、教員確保に向け、文字通り東奔西走の日々が続いた。補正申請書提出間際になっても適任者が確保できず、血走った眼で終夜、可能性のある情報を探るとともに、無駄を承知で就任要請のお願いにあがるなど、先方にとっては迷惑千万ではあれ捨て身の行動をとらざるをえない状況がつづいた。今となっては、秘話とも云うべきいくつかのできごとを経て、修士課程、そしてその後の博士後期課程は発足の運びとなった。そこでは、真田是先生はじめ、今は鬼籍に入られた多くの泰斗と称される先生方のご協力が、大学院開設に向けての最後の一押しとなった。諸先生方への折衝をとおして痛感したのは、研究や待遇さらには地域的条件に恵まれない本学への着任を要請するに当たっては、今自分たちが目指していることへの誠心誠意の説明と熱意でしかなかった。

さらには本学の独立行政法人化という運営形態変更が待ちかまえていた。県庁大学班との２年余りにわたる作業がつづいた。県庁の精鋭とともに、本学でも法人化準備室を立ち上げ、多くの先生方の協力のもと、作業を指揮することとなった。授業その他の関係もあり、県庁との共同作業は夕刻７時頃から始められたが、広範な課題を前に、毎日の作業が日付を超えることは希ではない状況のなか、ほぼ予定した日程で作業を終えることができたことに安堵する間もなく、法人化体制の具体的運用に向けての日々がまた待ち受けていた。課された責任を誠実に果たしていくことだけを自らの課題とする日々であった。

３　白秋

１）課題遂行の背景

これらの作業を進めていくなかで心を占めていたことはただ一点であった、それは「山口県立大学をさらに進化・成熟させる」という想いであった。1975（昭和 50）年に着任して以来、常に感

じて来ていたこと。それは、あらゆる面で大学としてさらに深まりを持たねばならないという想いであった。教授職を襲い、さらには学部長職をはじめとする責任を負う立場になって以来、その想いは強まりこそすれ弱まることはなく、その課題こそが私の最優先課題となっていった。それは、課せられた責任を誠実にこなすという過程の中で、自分の行動への合理化とでも云うべく湧き上がってきた側面でもあったが、それ以上に私が引き受ける自らの使命として意識されるものであった。いわば私のアイデンティティは、大学の未来と一体化していった。

大多数の学生にとって、キャンパスライフは一回性を持つ。その限られた時間を過ごす場として、山口県立大学はいかにあらねばならないかという問いへの答えが「更なる進化・成熟」であった。女子専門学校として発足以来の短大、女子大とつづく共学の伝統を現代へとアレンジすること。そのために必要な学部立てへの再編成。現代の学部教育に求められることを「学生教育」と特化すれば、そのカウンターパートとして研究を担保する組織として大学院を開設する必要があること。しかもそれは、進化の形態として博士学位を発給することをもって本学の地位を盤石なものとすること。１８歳人口のみを対象にするのではなく、公立という立地の特性として、地域を意識する営みを強化すること。そのために共生センターを設置すること。国際化への対応に向けた専門部署の開設。新たな大学の運営形態の改革に向け、意思決定システムの見直しや教授会のありかたについて見直すため、法人化に向かうこと。

これら大学のソフト面の改革に、自らの全精力を傾け、そしてそれらの大半を達成した後に残る最大の課題は、1996（平成８）年の看護学部棟と講堂の建築以来滞っていたキャンパスの整備計画を再浮上させるという課題であった。いや、その目的に向けてこそ、なし得る、あるいはなすべき教学のソフト面の改革を、強引さを伴いながらも成し遂げていった行動の背後にあるものであった。キャンパス整備に向けた先達の遺志実現に向け、その灯を点しつづけるという私なりの使命の継続こそがもうひとつの課題であった。

幸にもその火は再びあがり、県当局はキャンパス整備に向けた計画を具体化し、待望の建築計画が実現に向けて動き出すまでになった。課された責任の遂行と達成を意識した瞬間であった。しかしそれは、組織の原理と自らが志してきたこととの乖離が意識の中に強まる瞬間でもあった。課された責任を誠実に果たしていくことのなかに自らのアイデンティティを求めてきた身にとって、選択肢は、自らのアイデンティティを貫き守ること。そのための一分を通すという選択しかあり得なかった。結果としてそれは、自ら課し、そして期待された責務と役割からの解放となり、新たな自己アイデンティティの展開に向けた歩みへの始まりとなった。振り返るとすでに60歳を過ぎていた。

２）自己探求の新たな次元へ

３ヶ月もつか、１年耐えきれるかと思いながら始まった山口での生活も、40年を経た。たくさんの人と出会い、さまざまなことを経験し、ある時は悲嘆に暮れ、そして時に歓喜にあふれた日々であった。

今、研究室に戻り、来た道を静かに振り返りつつ、心理学への興味、自己への関心について思いをめぐらしている。「いったい自分とは」という問いから始まった探求は、さまざまなできごとをふまえ、どのように答えを出そうとしているのであろうか。

大学業務に没頭している間、発達心理学の研究動向はダイナミックに変化した。生涯的視点は言うに及ばず、近接諸科学との連携のなかで発達科学としての新たな装いが立ち現れてきている。自らの研究領域との関連からみれば、そのこと自体は驚くには値しない。むしろ、人間存在あるいは発達という現象を、進化学、神経生理学などを含む生物科学的側面のみならず社会科学的視点、さらには人文科学的視点をも視野に入れて捉えるという極めて妥当な方向へと進んでいることは、自

らの立脚点を精神生物学と同定した折から意識していたことであり、自らの領域によって明らかにしようと試みることの制約を明確にしたうえで、人間存在や発達という現象を説明しようと試みていたこととなんらの矛盾も生じることはない展開であった。

しかし、私自身の研究視点に決定的な違いがいくつか生じ始めている。そのひとつは、乳児研究の魅力にとりつかれるとともに、その奥深い課題に没頭していた時代には気づかなかったことだが、自らの加齢に伴う影響とでも考えられる要因が、発達研究を進める私自身の視野を転換させつつあることである。

かつて、私は人生の時間の流れである「発達」という現象について、「時間の流れ」という次元では幼い頃も老いて後も、物理的な特性に応じたものとしてしか捉えてはいなかった。せいぜい、達した年齢との相関において、過ごした時間と折々の時点の相対的意義の違いが生じることぐらいしか意識することはなかった。また、人生は一回きりであり、その中に生きるヒトにとっては、それを前提とした時間の流れしか存在しないと感じていた。したがって、人生の各時期を表現する「ライフステージ」という表現を折々に使ってきた。しかし、自らの加齢に伴うライフイベントの積み重ねのなかで、自らの人生は、父が、あるいは祖父がそうであり、そして子がさらには孫が繰り返していくであろう人生との連続性があるという思いが急速に強まってきつつある。それとともにErikson の「ライフサイクル（人生周期）」（エリクソン ,E.H.・エリクソン ,J.M.、2001）という表現が、初めて納得のいく概念として私流に理解されはじめてきた。やまだ（2011）は、発達心理学研究に世代間の関係性を含む必要があることを提唱しているが、まさにそのこととも符合する見方が生じてきている。

そのような変化が生じてきたもうひとつの背景は、進化発達心理学の影響である。進化発達心理学とは、進化すなわち適応的観点から、種一般のみならず個体の精神発達の説明を試みる領域である。その立場から見ると、Bowlby（1969）によるアタッチメント概念が進化的、生態学的な親子双方の生き残り戦略の一環とみられるように、ヒトは加齢に伴い「人生の意味」あるいは「生きる意義」とでも云うべき人生晩期の問いかけに肯定的な回答を求め始めるという帰結が世代の連環、つまり「ライフサイクル」という概念を導く考えへとつながってくる。実際、Erikson の自我論には、「生きることへの希望へ」と自らの生を超えて自我が拡大していくことが最終的に想定されているが、それをとおして人類は生き延びるという戦略を完遂しているということができる。

このような見解とも相俟って、「あらゆる行動には意味があり、偶然ではなく必然的背景がある」という見方が急速に私の中に強まりつつある。その視点で発達を捉え直してみると、それまでとは全く異なった発達の姿が浮かび上がってくる。たとえば、心的病いも、非社会的といわれる行動も、あるいは反社会的行動すら、視点を変えれば、種があるいは個体が適応していく上での合理的行動として評価されるものと意味づけられてくる。

それらのことを含め、晩期を迎えつつある私の研究は、若い頃のそれとは明らかに趣を異にし始めてきた。それはもはや「業績」として他者の評価を意識するものではなく、自らが自らのために行うものへと変化するという、ある種わがままなものへと移りつつある。それとともに、実験的・実証的研究から、より幅広く人生を描いたエッセイや小説、あるいは時代を生き抜いた人々のドキュメントといった素材をもとに、心の動きを辿る試みへと傾斜しはじめてきている。とりわけ、明治維新をはじめとする急激な体制変換のなかを生き抜いた人々の生き方は、発達科学的視点からみたとき、精神発達がいかに多様な要因の絡まりから推し進められているかを考察する資料の宝庫のように思われる。しかもこれらの素材は、心理学のみでは対象にしえない奥行きを持って心の動きや人生を描いており、参考になることが多い。科学としての矩とのかかわりのなかで、果たしてどこまで人生や精神発達の真実に迫りうるのか、

研究方法の開発を試行し始めている私の当面の課題である。

これまでの研究生活、大学生活をふりかえってきた。それらを概括すると、それは一貫して自分を探しての旅であり、自分を確かにするための路であり、自分でありつづけるための途であった。

人はさまざまな場面で自分を見失い、そして新たな自分を見つけ、見つけた自分を自ら裏切り、そしてまた新たな自分の存在を求めて苦悶する。生涯とは、人生とは、そのように自分の姿を探し、自分の生き方を問い、時に悩み苦しみ、そして喜ぶことのなかにあるものである。「こころ」というものが宿ったが故に背負った業と云うこともできるかもしれない。

若い頃はそんな心をもてあました。今になってもその業から逃れきれてはいない。しかし、それがヒトという種に備わった逃れることのできない生き方なのかもしれない、「生きる意味とは」、「自分とは」という問いに答えは出ないけれども、さまざまに自分を相対化し、問い続けると云うことにこそ、それらの意味の答えは潜んでいるのかもしれない（戸田山、2014）。

ヒンドゥーでは「林住期」とも名付けられる頃にさしかかった（五木、2008）。古代中国では「白秋」期である。これまでの役割から解放され、自分の新たな可能性に向けた時間を楽しみながら、「私とは？」という課題の行方をのんびりと辿っていきたいと思っている。心理学を志した原点に返り、これからは、「自らの老い」をも考察の対象のひとつとしながら生涯にわたる心のたどる途を探っていくという課題と向き合っていきたいと思っている。「自分自身を知ることが真の英知である」（エリクソン ,E.H.・エリクソン ,J.M.、2001）という言葉を道しるべとしながら、いずれ訪れるであろう玄冬期の「老年的超越 (gerontranscendence)」に向けて。

あとがき

たくさんの人たちにお世話になりながら、今日まで過ごしてきました。そのすべての人たちに感謝申し上げます。

とりわけ、40年に及ぶ教員生活の間、たくさんの学生諸姉兄のおかげで今日までを過ごすことができました。「可能性をつぶさぬこと」。皆さんと接するに当たって自らに課したモットーでした。しかし、私の能力が及ばなかったことも多かったのではないかと思います。この場を借りて至らなかった点をお詫びしておきたいと思います。

「ライフサイクル」という概念についての思いを述べましたが、それはまさに世代間の連鎖を意味しています。私たちがそうであったように、若い世代の皆さん方がきっとつづいてくださることを信じています。なかでも、「大学とは？」という問いに向け、山口県立大学の更なる進化・成熟が果たされていくことを信じて故郷・佐賀へ帰っていきます。丘の上のキャンパスに若人のはじける笑顔があふれる様子を夢見ながら。

【参考文献】

Bowlby,J.　1969　Attachment and loss , Vol.1 Attachment. London:Penguin books

エルカイント ,D.（久米稔・三島正英他訳）1983 急かされる子どもたち　家政教育社

エリクソン、E.H.・エリクソン、J.M.（村瀬孝雄・近藤邦夫訳）2001　ライフサイクル　その完結　増補版　みすず書房

五木寛之　2008　人間の覚悟　新潮新書

三島正英 1982　複数母呈示による乳児期初期の対象の同一性形成についての追試的検討　教育心理学研究　Vol.30（４）49-53

三田誠広　1977　僕って何　河出書房新社

村上春樹　1991　ノルウエイの森・上下　講談社文庫

Piaget, J. (Cook, M. trs.)　1954 The construction of reality in the child. NY:Basic Books

戸田山和久　2014　哲学入門　ちくま新書

やまだようこ　2011「発達」と「発達段階」を問う：生涯発達とナラティヴ論の視点から　発達心理学研究　22（４）, 418-427